

〈教育研究報告〉

保育実習における指導者の指導意識に関する一考察：
実習施設の職員へのインタビューから

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): 保育実習, 児童福祉施設, 児童館 キーワード (En): practical childcare training, child welfare facilities, children's center 作成者: 佐藤, 晃子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/2000049

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



保育実習における指導者の指導意識に関する 一考察

— 実習施設の職員へのインタビューから —

佐藤 晃子

1. 本研究の目的、課題と方法

佐藤（2021）では、厚生労働省が示す「保育実習実施基準」や保育実習の標準的方法を示した『保育実習指導のためのミニマムスタンダード Ver.2』（全国保育士養成協議会編 2018b）に基づき、保育実習における施設実習及び児童館実習の目的や内容などを整理し、それを厚生労働省「児童館ガイドライン」と照合させ、保育者養成における児童館実習の意義と課題を明らかにした。それを踏まえ本研究では、保育者養成における児童館実習の意義をより実践的な文脈に位置付けることを目的とし、保育士養成を行うある短期大学の実習受け入れ施設となった児童館の指導担当職員にインタビューを行い、佐藤（2021）で整理した指導の観点に即しながら、保育実習における指導者の指導意識の一端を明らかにする。分析にあたっては、実習生の「実習日誌」及び実習後の「振り返りシート」も補足的に使用する。

2. 施設実習の概要

対象とした短期大学の保育士養成課程では、保育士資格取得のための選択必修科目である「保育実習Ⅱ」（保育所）、「保育実習Ⅲ」（施設）（以下、「施設実習」とする。）は、それぞれ「保育実習Ⅲ」、「保育実習Ⅳ」として2年次の夏休みに実施されている。保育所以外の児童福祉施設に就職を希望する、または就職を視野に入れている学生が、施設実習を選択している。実習先は、大学が確保した施設の中から学生の希望する施設種別を考慮して実習担当教員が決定する。児童館を希望する場合のみ、学生の居住する自治体または近隣の自治体の児童館に個別に教員が依頼している。

2021～2023年度の施設実習の状況を見ると、多い順に、児童館（13）、児童養護施設（6）、障

害者通所施設（5）、児童発達支援センター（4）となっている（カッコ内は人数）⁽¹⁾。児童館については、埼玉県内の3市4館、東京都内3区3館で実習を行った。

3. インタビュー調査の概要

インタビュー調査は、2021～2023年度に実習受け入れ施設となった児童館のうち、東京都A区の児童館（a児童館）1館と埼玉県B市の児童館2館（b児童館、c児童館）の指導担当職員を対象とし、2023年9月4日及び6日に、1時間半～2時間程度実施した（半構造化インタビュー）。データIDは、a児童館をIN-1、b児童館をIN-2、c児童館をIN-3とする。

インタビュー項目は、①施設、事業・活動の概要、②利用者・地域の状況、③職員体制、④実習の受け入れ体制・状況、⑤実習の実施計画と内容、スケジュール、⑥実習における指導内容・方法、指導における留意点、の六点である。佐藤（2021）で、保育者養成という側面から、児童館実習を通して学ぶことができると考えられる点を三点に整理したが、これらは「指導の観点」となるものと言え、⑥については、この観点到に沿って、インタビューを行った。それは第一に、「遊びの指導」についての理解と実践、第二に、「子どもが抱える課題への対応」についての理解と実践、第三に、「子育て支援」についての理解と実践である。

それぞれについてももう少し詳しく整理すると、第一に、「遊びの指導」についての理解と実践については、子どもを主体とした遊びの展開、子どもの年齢・発達に応じた関わり方、支援方法、プログラムや計画の立案・実施等を理解、実践することである。第二に、「子どもが抱える課題への対応」についての理解と実践については、遊びを媒介に、「気になる子ども」に気づき、背景も含めて理解しようとするのだと言える。第三に、「子育て支援」についての理解と実践については、子育て支援の活動に参加し、プログラムを立案・実施するだけでなく、実際に保護者と関わりながら、児童館・職員の子育て支援の役割・機能を、地域へも視野を広げつつ理解・実践することである（佐藤 2021：95-98）。

4. インタビュー調査の結果と考察——児童館実習における指導担当職員の指導意識——

インタビュー記録を見ていくと、児童館実習における指導の観点として、上記の3つに加え、「地域の中の児童館」「地域の居場所としての児童館」といった、地域との関わりの中にある児童館への認識が多く語られた。職員の役割でいうと、「コーディネート」「コーディネーター」（IN-1）、「つなぎ」（IN-2）との言葉で表されるものである。したがって、ここでは、インタビュー記録を、(1)「遊びの指導」、(2)「子どもが抱える課題への対応」、(3)「子育て支援」、(4)地域の

中の児童館、地域の居場所としての児童館、という4つの点に分けて整理、分析していく。

(1) 「遊びの指導」

児童館では、行事や事業・活動が日々行われているが、利用者である子どもや保護者から見て、「児童館に行ったら、この時間、このように過ごす」という決まったプログラムやスケジュールがあるわけではない。子どもが来たい時に来て、好きなように過ごし、帰りたくなったら／帰る時間になったら帰る、というところである。「誰が来てもいい」し、「誰が来るかわからないし、誰も来ないかもしれない」(IN-1, 3)。子どもが遊びに来る場であるが、いつ来るか、何をして遊ぶか、誰と遊ぶか、または遊ばないかは、子ども自身に委ねられている。

それゆえ、「遊びの指導」といっても、決まったクラスや子ども（集団）を相手に、職員がリーダーとなって、決まった時間、決まった遊びを展開するわけではない（もちろんそういう場面もある）。子どもに関わるにも、「予定していたことが何もできなかったから、今日は何もできなかった、っていうんじゃないくて、予定したことがあったけど、また次にやろうかな」くらいのある種の「おおらかさ」や「いろんなことに興味を持って楽しめる」(IN-1) ことが求められている。学生の日誌からは、散歩一つとっても、その「自由さ」やそこでの「偶然の出会い」を楽しむ姿に驚きと児童館らしさを感じている様子が見て取れる（2022年度日誌、a児童館、実習生①）。

このように、児童館での過ごし方や遊びは自由なものであり、何をするか、しないかを決めるのはあくまで子どもである、という理解の上に、実習生がいかに関わるか、関わられるかというところが大切になる。

児童館で子どもと関わりをもつには、まずは「子どもと一緒に遊ぶ」ことが重要である。そのための方法がいくつか提示された。たとえば、自分の得意なことをきっかけにすれば、子どもと関わりが持ちやすくなることである。

何か得意なことがあれば、それを活かせるから、自分の特技、私は絵を描くのが得意ですとか、本を読むのが得意ですとか、ピアノが得意ですとか、なんでも良いじゃないですか。それを生かして、仕事ができますよ。子どもたちって、「この人すごい」それで、子どもが寄ってきてくれるじゃないですか。だから、得意なものを一つ、作っておくと良いですよって実習生には話をするんですけど。(IN-2)

また、子どもがしている遊びがわからないからといって、一緒に遊べない、遊ばないのではなく、子どもと「その場で一緒に遊ぶのが遊び」だからこそ、一緒に遊びたいという気持ちを持って、わからないことは「子どもに聞く」「子どもに教えてもらう」という姿勢が大事であることも

語られた。

(実習生は、保育所や幼稚園での実習での経験などから,)「先生」にならなくちゃって思っていて、私よく「子どもに聞いてごらん」、小学生なんだから(と言っている。)マンカラ(筆者注:ゲームの名称)をやっている時に、わからないからって入らない学生いるんですけど、そこを「教えて」って入れれば、子どもはお姉さんと遊びたいから教えてくれるのに、(中略)できなくっても楽しくその場にキャーキャーワーワー言って、自分が下に(なって)、教えてもらえば、それで子どもは先生になれたって思うし、その場で一緒に楽しむのが遊びだと思っただけ(後略)(IN-3)

さらに、遊びの中で、「一人で来ている子をつないで、自分達は抜ける」(IN-2, 3)という職員の役割に対する言及もあった。そこまでは実習生に求めている(職員がやれるようになるにも時間がかかる)、というが、学生の中には子どもと一緒に遊ぶ中で、遊びを通して子ども同士をつなげるところまで、試みようとする姿が見られた(2022年度実習日誌, b 児童館, 実習生②)。

他にも、児童館に初めて来る子も一人で遊びやすいよう、日々さまざまな事業を行っている児童館では、一人の決まった職員ではなくいろいろな職員と一緒に動くことで、実習生が関わりの「立ち位置」を見つけられるようにしているという。

そういうような形(職員や地域の人と共に同時並行的に日々事業を展開している)の中で、どういうふうに関わっていったらいいかっていう立ち位置を、いろんな職員を通じて実習生には伝えられたらいいかなって思っています。

実習をしてもらって、十日間ぐらいのプランを作るんですけど、その時その時で行事が違うので、(内容は)変わってしまうんですけど、特に夏休みは、定例より夏休みにしかできないいろんな事業があるので、その中で毎日事業に入ってもらって、事業をしている職員と一緒に準備をして、本番を迎えて、片付けして、反省会できるところはして、って(職員に)ついてもらいながら、十日間(ぐらい)過ごしてもらっている(中略)大枠は、ホールがあるので、そこで(子どもと一緒に)遊んでもらうんですけど、あとは(その日の)担当職員が準備をしたりするときに話をしてもらったりとか。(IN-1)

一方で、中高校生世代への関わりは、年齢が近いからこそ、実習生が関わりに難しさを感じ、関わり方の助言を受けながらも、実際にはほとんど関わる事ができていない様子がいずれの職員からも語られた(IN-1, 2, 3)。学生の日誌などにも、中高校生世代の子どもになかなか関わ

ることができなかった、関わるきっかけがつかめなかったという「反省」や関わりに苦心した様子が散見される。

(2) 「子どもが抱える課題への対応」

いずれのインタビューにおいても、子育てに悩む保護者、学校でうまく人間関係が築けない子、不登校や高校中退者、発達に課題を抱えている可能性のある子など、何らかの「課題」を抱えた子どもたちが児童館を利用している様子が語られた。しかし、短い実習期間の中では、一人ひとりの子どもと信頼関係を築き、相談に乗ったり、課題への対応ができるようになるまでには至らない。だからこそ、そうした子どもを「課題のある子」とカテゴライズして関わるのではなく、目の前の子ども、保護者にとにかく＜関わってみる＞こと、職員の＜関わりをよく見る＞こと、が重視されているように思われる。

実習生の日誌からは、実習生自身が子どもとじっくり関わることで、子どもの発言や行動などの背後にあるさまざまな「気持ち」への気づきがあることがわかる。

子どもの喜び楽しむ姿だけでなく、怒ったり泣いたり、否定的な発言をする姿などさまざまな場面の姿には目に見えない気持ちが隠れているのだとよくわかりました。またそれを無理に引き出そうとするのではなく寄り添うことで少しずつ子どもの心が開いていくと考えられました。(2021年度実習日誌、b 児童館、実習生①)

他にも、職員などに口や手足を出してしまい、最初は「問題児」と感じていた子どもも、遊んでいく中で「かまってほしい」子なんだと「子どもの思いや考え」に気づいた、という振り返りも見られた(2022年度振り返りシート、c 児童館、実習生①)。

また、子どもと関わりをもつにあたって、ある児童館では、子ども個人の情報を「根掘り葉掘り聞かない」というスタンスをとり、学生への指導も行っている。

元からうちの〇〇(運営法人)の考え方が、先生と呼ばないよ、児童館の職員は、先に立つものじゃないから先生じゃないんだよ。近所のお兄さん、お姉さん、おじさん、おばさんだったり、親戚の人ぐらいの距離感を(もっている)。ただ毎日会っていたりとかするので、(職員は)友達、(児童館が)実家みたいになる中で、だからこそ気付ける、子どもの課題に気付けたりするんですけど、相手の個人情報を根掘り葉掘り聞きすぎない、というのと、自分も話しすぎないように(言っている)。

職員との信頼関係があるからこそ、本当の気持ちや置かれた状況を子どもから話をするなど発信をしてくれる。そうした様子を実習生も観察している。ある実習生は、夏休み明けの子どもがその不安やしんどさを職員に話している様子に「衝撃」⁽²⁾を覚えながらも、「不安だったことを職員に話せるぐらい信頼関係が築かれている」ことや「こうした会話を行うことが“日常”としてできる部分に良さを感じた」と記している（2022年度日誌，a 児童館，実習生①）。

(3) 「子育て支援」

児童館が、保育所や幼稚園と最も異なるのは、「親御さんがいての関わり，支援」(IN-2) となっているところである。乳幼児は保護者と一緒に児童館に来ており，職員は保護者と直接的な関わりをもち，支援を行う。一方で，保育所や幼稚園の実習において保護者と直接関わることはないに等しく，児童館実習の中で，保護者との関わりや保護者と一緒にいる乳幼児への関わりに学生が大きく戸惑うのも事実である。

したがって，実習の中では，保護者や保護者と一緒にいる乳幼児との関わり方や関わる際の視点が具体的に学生に伝えられている。それはたとえば，活動やプログラムと一緒に参加して，参加しながら実習生が自分の存在をアピールしていくことや，保護者にインタビューの如く話を聞いてみること，などである。

幼児クラブにまず入ってもらって，職員の声かけとか，〇〇（地域ボランティア）の人たち（だけでなく），幼児クラブに「サポーター」って，さっき言った，OBの若いママたちが入ってるんですね。（実習生には幼児クラブに）一緒に入ってもらって，様子を見てもらうんですけど，職員によっても（やり方が）違うんですけど，「写真撮ってね」って（実習生にカメラを渡）して，写真撮りながら，様子見ながら，歩きながら，入りながら様子を見てもらう。見学者だけにはならないように，行事に入ってもらって，準備から関わってもらって。（IN-1）

聞くことに徹すれば良いのかなって。相談されることもあるじゃないですか，実習生だって。そこは，結論出す必要はなくて，ママが結論出せばいい，聞いてあげれば良いことで，それでもこれはっていうことは，「こういうことを聞かれたけど，どうやって答えたら良いですか」って相談はしてくださいね，って伝えます（後略）(IN-2)

お母さんも実習生たちに話しかけてくださる方も多いので，「お母さんたちがどんな思いで子育てをしているのか，どんなことに悩んでいるのか，解決しなくてもいいんだから，話して

「ごらん、聞いてごらん」っていうと、聞ける学生はお母さんたちにそういうのを聞いて、出産の時の大変さだとか、イヤイヤ期って大変なんだって（話を聞き出している。）（後略）（IN-3）

実習をしている学生自身も、職員の保護者や乳幼児親子への声かけや関わりの様子をよく観察しながら、関わり方を模索している姿が日誌などからうかがえる。

今までの実習先では、保護者対応がなく子どもとのかかわりだけだったため、今回保護者と関わるのが難しいことだと知った。何を話したらいいのか、どうコミュニケーションをとるのが正しいのかわからないことだらけだったが、職員の方に子どものマイブームや、困っている保護者へ声掛けをしたら良いのでは？とアドバイスを頂き、少しずつ保護者の方と話せるようになった。（2021年度実習日誌、b 児童館、実習生③）

他にも、職員の関わりが「さりげない援助」であることや、保護者同士を「つなぐ」役割を職員や児童館が担っていることへの気づきも見られた（2021年度実習日誌、b 児童館、実習生①）（2022年度実習日誌、b 児童館、実習生②）。

また、乳幼児の活動においても、その場においても参加するかどうか、どのように参加するか、「子どもが決める」のは基本である。他方で、子どもが集団活動に参加しないことを気にかける保護者もいるので、その配慮もなされており、それは実習生に伝えられている。その場に保護者が一緒にいるからこそ、自分で決めて自由に遊ぶ児童館ならではのやり方や乳幼児ならではのその場への「参加」の仕方について、保護者に理解を促すような関わりがなされていると言える。

手遊びやりながら、（親子向けの集団活動に）参加しない子がいたときに、お母さんたちが「うちの子参加しないわ、なんで参加しないんだろう」って思っていたりするんですけど、（子どもは手遊びを）見てくれたり、目はこっちを向いてたり、耳がこっち向いてたりするので、「お目々よく見てくれたね」とか、手遊びの間に参加していない子にも声をかけたり、おもちゃで遊んでも「その場にいるだけで良いんだよ」と言ったり。参加することだけが（活動への子どもの関わり方ではないので）、ここは「やりたい子だけがやれば良いんだよ」っていうことを、お母さんたちが負担なく（わかることができるようにしている）。実習生にも、（子ども）全員が（手遊びなど活動を）やらなくても良いんだよ、って言ってるかな。（IN-3）

(4) 地域の中の児童館、地域の居場所としての児童館

今回インタビューを実施した3館ともに、それぞれ形や方法は違うが、地域との関わりが深い児童館である。(1)～(3)の観点以外にも、「地域の中の児童館」であり、児童館が子どもも含めた「地域の人たちの居場所」であることの語りが多く見られた。たとえば、乳幼児の保護者が「職員寄り」の動きをしてくれ、子どもと遊びに来た際に、消毒作業の手伝いをしたり、自分の子どもを見つ、別の子とも遊ぶ姿があったり (IN-3)、活動や事業をたくさんのボランティアや地域の人が支えていたり (IN-1, 2, 3)、利用者であった子どもや保護者が、ボランティアやスタッフになるという「人の循環」がある (IN-1) ことなどである。

そして、こうしてたくさんの大人が出入りして関わり、児童館が成り立っていることを、実習生にも気づいてほしい、感じてほしいという思いも語られた。

児童館といっても、地域の居場所を作っている活動をしている。児童館の実習ですけど、お母さんにとっても赤ちゃんにとっても、いろんな人に居場所の提供の活動だとわかってくれたらいいのかなって。(IN-1)

地域というのが、この〇〇(児童館名)の良さでもあり、実習だけだと伝わらないので、地域のイベント、町会の人たちと色々(イベントを)やっているんだよ、と。(中略)よく実習生には、「児童館は0から18歳まで来るっていうけど、その保護者の方、おじいちゃん、おばあちゃん、ボランティアさんとか(も来て)いるから、「ゆりかごから墓場まで」じゃないけど、多種多様な人が来るから、いろんな人と関われる仕事だよ、ということ(実習前の)説明の時に言うかなって感じですね。(中略) (IN-3)

実習生も、こうした地域の人や保護者が児童館に関わる姿に、新鮮な学びを得ている。

今日のベーゴマ教室の様子を見て、児童館とは地域と子どもをつなぐ場所だと学びました。子どもが楽しむことはもちろん、保護者の方も一緒になって全力で遊びを楽しめるところがすごく魅力だと感じました。このような交流の場を設けることで、大人と子どもとの色々な繋がりを作っていけるのだと学びました。(2021年度実習日誌, a 児童館, 実習生①)

5. 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、児童館実習における指導の観点となる三点に基づいて、指導担当職員の指導意識の一端を明らかにした。実習における指導においては、特に、児童館とはどのような場所なのか、職員や地域の人がどのように児童館の事業や活動、利用者（子ども、保護者）に関わっているかということ、実習生が自ら＜関わってみる＞こと、職員の＜関わりをよく見る＞ことを通して理解・実践することを大切にしているように思われる。そしてこれは、保育実習の目的である実践的な施設や職員の理解ということにとどまらない。実習生も、子どもや保護者、職員、さらには地域の人たちと、「ともにその場をつくる」というイメージが近いのかもしれない。

特に（2）や（4）に関しては、0～18歳までを対象とした地域に開かれた児童福祉施設という児童館の特徴をまさに表すものであると言えるが、一方で、子どもや保護者、地域の人との日常の継続的な関係性があるからこそ可能な関わりでもある。ある意味、日常に埋め込まれたものであって、実習の短い期間の中でそれだけを切り出して取り組むことも難しい。だからこそ、「ともにその場をつくる」ことが重要なのではないだろうか。

ただし本研究は、インタビュー対象者数が極めて少なく、今回の結果・考察は仮説的にとらえるべきものである。今後、対象や対象者数を増やすなどして研究を継続していき、施設実習や保育者養成のあり方の検討につなげていきたい。

《注》

- （1） 全国保育士養成協議会による養成校の学生を対象とした調査によると、施設実習を選択した学生の実習先となった施設は、障害者入所施設（24%）、児童養護施設（20%）、児童厚生施設（児童館）（14%）、児童発達支援センター（13%）、障害児入所施設／障害者通所施設（8%）の順となっている（全国保育士養成協議会編 2018a：6）。
- （2） 実習生自身がこうしたことを大人に話すことができなかつたため、子どもが職員に話をしていたことを「衝撃」と表現している。

引用・参考文献

- 佐藤見子 2021 「保育士養成における児童館実習の意義と課題」『川口短大紀要』 35, pp. 87-101
児童健全育成推進財団編 2007 『児童館 理論と実践』
児童健全育成推進財団編 2011 『児童館の機能と運営』
児童健全育成推進財団 2015 『児童館論』
児童健全育成推進財団 2023 『児童館論（改訂版）』
児童健全育成推進財団 2018 『児童館のための実習生受け入れマニュアル』
全国保育士養成協議会編 2018a 『保育実習の効果的な実施方法に関する調査研究 研究報告書』
全国保育士養成協議会編 2018b 『保育実習指導のミニマムスタンダード Ver. 2』 中央法規出版
その他、インタビュー対象施設の実践記録・報告なども参考にした。

（提出日：2023年9月20日）